

(実践事例)

授業レポートを活用した授業改善への取り組み

物部 剛

高等教育フォーラム 第4号抜刷 平成26年3月

授業レポートを活用した授業改善への取り組み

物部 剛¹

2008年から2013年までの6年間、共通教育センターで開講している「産業社会と知的財産」の授業に、ゲストスピーカーとして1コマだけであるが、「大学における知的財産権」をテーマとして講義を行った。受講生から提出されるレポートを授業改善のための資料として精査し、レポートから得られた特徴をもとに授業改善を図ることで、受講生の満足度を向上させることができたと思われる。受講生から発信される情報を理解し、活用することが、授業改善には必要ではないか。

キーワード: レポート、授業改善

1. はじめに

2008年から2013年までの6年間、共通教育センターで開講している「産業社会と知的財産」の授業に、ゲストスピーカーとして1コマだけであるが、「大学における知的財産権」をテーマとして講義を行った。この授業は、知的財産が産業社会において、創造・保護・活用の面でどのように取り扱われているかについて、多面的に明らかにすることを目的として開講された科目であり、弁理士、企業の知財担当者など、実務家などで構成されるチェーンレクチャー形式の授業である(表1参照)。その中で、大学における知的財産マネジメントの実務的な事例を交えた講義の依頼があった。当然ながら、毎年受講生は別人であり、ゲストスピーカーの講師も変更があったようであるが、筆者なりに6年間の経験を改めて振り返り、筆者なりの授業改善に取り組み、その改善努力の結果が受講生のレポートから垣間見ることができたことから、その内容を

紹介することとしたい。

2. 授業への取り組みと自己評価

依頼を受けた最初の年度については、まず、受講生がどの程度の特許に関する知識を習得しているのかが分からないこと、また、他のゲストスピーカーがどのような講義を行うのかが分からないことから、特許に関する基本的な話をするべきなのか、大学における特徴的な事例を話すべきなのかが明確でなく、授業担当の教員に相談したが、大学での取り組みについて話してもらえればよいとのことであった。悩んだあげく、授業担当教員から依頼のあった通り、本学での知的財産権への取り組みについて、できるだけ事例を交えた形式で構成した資料を作成し、授業に利用した。大学が行う知的財産活動ということにより鮮明にし、非営利団体の特許活動という視点で特許を理解してもらうために、

表1. 平成23年度開講「産業社会と知的財産」授業内容・計画

第1回: 弁理士と弁理士業務について	第9回: コンピュータの進化と知的財産
第2回: 特許要件について	第10回: 企業における知財(特許)管理活動
第3回: 発明と靈感について	第11回: 放送番組を取巻くコンテンツと著作権
第4回: 中小企業における戦略特許と事業展開	第12回: 知的財産侵害物品の水際取締り
第5回: 発明、及びその外国出願と英語翻訳	第13回: 大学における知的財産の考え方
第6回: 知的財産と職業	第14回: 音楽著作権管理の実務
第7回: 特許紛争の実態	第15回: 知的財産訴訟の最前線
第8回: 企業の知財活動	

出展: 京都産業大学 シラバス検索システム
(<https://syllabus.kyoto-su.ac.jp/syllabus/html/2012/1417.html>, 2013.11.27)

¹京都産業大学 リエゾンオフィス

- (1) 民間営利団体とは違った視点で知的財産権に取り組んでいる事例
- (2) 営利団体でない大学が知的財産権に関わるようになった理由—特に政府の方針や政策動向の事例
- (3) 基本的な知的財産権の考え方を中心に講義を行った。

初めての講義を行った授業の受講生数は200名を超える状況であったため、一方的な講演方式でしか授業が行えず、受講生とのインタラクティブな関係を構築することが難しかったこともあり、正直なところ、受講生の反応も良好ではなかった。当然ながら、受講生からのレポートの内容も好ましいものではなかったようで、担当教授の好意により、レポートの一部を拝見する機会を設けてもらったが、開示されたレポートも、比較的良好なものが選択されて開示されていたようで、数は少なく、また、その内容も期待するほどのものではなかった。そして、当初の悩みであった、特許制度の基本的な知識を既に他の授業で習得しているかどうかという点についても、十分には知ることができなかった。

2.1. 授業改善への取り組み

講義の依頼を受けた時、筆者が就職部にて業務を行っていた頃に就職ガイダンスを担当していた経験から、ガイダンスと同じようにすれば受講生も耳を傾けてくれるであろうとの考えがあった。しかしながら、現実には受講生の興味・関心を十分に得ることができず、また、伝えなければならない事項についても、受講生からの理解を十分に得られていないことがレポートから判明した。このような結果から、2回目の依頼はないと判断していたにも関わらず、2回目の講義を行う機会を得ることができ、1回目の授業の経験と、筆者が職務上受講していた研修などの経験をもとに、授業の資料、進め方などについて以下のとおり改善を試みた。

- (1) 大学という組織に興味をもってもらうために、ヨーロッパとアメリカの大学制度の違いを説明に入れる
- (2) 国の方針や行政施策については、必要最小限とする
- (3) 産学連携の動向や知的財産権の動向などを可能な限りグラフなどで説明する
- (4) インタラクティブな関係を構築するために、受講生への質問を用意する
- (5) 前列付近の受講生は比較的関心の高い学生である傾向が強いため、講義を行う時は、敢えて教室の後方まで移動しながら話す
- (6) 伝えたい内容を、受講生に明示する

- (7) 特許制度の基本的な内容は、確認程度の内容として、ボリュームを削減する

以上の改善の結果、教室での居眠りや途中退室の学生は減少したものの、受講生から提出されたレポートの内容を確認すると、筆者が伝えたいことが十分に反映されておらず、講義内容の一部を、受講生それぞれの視点で記述したというものが多く見られた。また、授業中に特許制度の理解度を確かめるために質問を試みたが、全般的な話は他の講師からも聞いている様子が伺えた。

3年目、4年目と上記と同様の傾向で、授業改善に努め、また、本科目の受講生数も100名に制限がかけられたことにより、比較的インタラクティブな関係での講義がし易くはなったものの、依然として、受講生の反応から、筆者が求める成果を見出すことは難しく、受講生からのレポートも、例年大きな変化はなかったようであった。

2.2. 成績評価資料としてのレポートから、授業改善資料としてのレポートへ

上記のとおり、4年に渡りゲストスピーカーとして講義を担当させていただいたにも関わらず、結果として、受講生の理解度、満足度を向上させるための効果的な改善方法を見いだすことができなかった。それにも関わらず、5年目の講義の依頼をいただいた時には、何を改善すればよいのか正直分からなくなってきていた。そこで、同僚に相談をしながら、本学の受講生を対象としている以上、本学構成員が何を伝えるべきかという視点に立ち、改めて今までの講義内容についての見直しを行った。過去4年間は、筆者自身が作成した授業用のパワーポイント資料の改定を行い、資料に詰め込んだ多くの情報を整理し、簡潔に提供することを心掛けていたが、教育の専門家ではない事務職員が学生に提供できることは、「理論」や「知識」ではなく、あくまで「実践に基づいた取組み姿勢」であることが中心であるという立場にたって授業を進めることとした。そして、5年目の講義を前にして、初めてレポート内容を「自己評価の物差し」として利用することに取り組み、受講生がどのような内容に興味を示しているかを整理するとともに、自らが伝えたい内容に関して書いているレポートを参考に、講義の組み立てを改善することとした。

実際にレポートを授業改善のための資料として改めて精査すると、一定以上の量のレポートを書いている受講生については、講義内容を網羅的に書いている学生と、講義内容と大学との関係を中心に作成している学生とに大別することができた。また、この2つのレポート群にはそ

れぞれの特徴が読み取れ、前者は、講演内容を端的にまとめることができているが、個人の意見があまり多くみられない。後者は、特定の話題についてまとめてあり、それに対する自分の意見・感想が多く書かれている傾向があった。どちらのレポートがより好ましいということではないが、筆者の講義については、多くの部分が基礎的なもので、かつ、経験に立脚したものであり、論理的思考に基づいた内容ではないことから、5年目については、より多くの学生が後者のレポートを作成できることを想定した講義内容に注力することとし、受講生に伝えたい内容を、以下の3点に集約することとした。

- (1) 本学の知的財産権に対するポテンシャルを伝えること
- (2) 大学の知的財産権の活動の原資が学費であり、その有効活用に注力していること
- (3) 大学のミッションは、常に学生及び社会への貢献であること

その上で、本学の知的財産権を利用した活動がどのようなものであり、一般的な知的財産の活用とは異なることを伝えることとした。

なお、このような変更を行った理由は、受講生の本学への評価を高くさせることで、本学での帰属意識を高めることができるのではないかと筆者の思いによるものであった。

3. 改善結果

上記のとおり、常に本学または学生生活というものと、知的財産権をリンクさせることを念頭に置き講義を行った結果、受講生からのレポートには、本学への再評価、また、本学学生であることへの満足感、そして、特許という制度も利用する団体の性格により、求めるものが異なるということを中心に書かれるものが多くなり、今後、大学がどのように知的財産権を取り扱っていくべきかということや、本学の今後の活動に期待するというような意見が多くみられるようになった。最終的に6年間に渡るゲストスピーカーの経験の中で、5年目にしてようやく受講生から筆者が目指す授業としての合格点ももらえるレポートをいただくことができるようになったのである。

当該授業の担当教授からは、通常の知的財産権の利用方法とは視点が違い、興味深い話であると最初の授業の時に言われたものの、学生のレポートを見る限り、筆者の講義は、常に合格点ももらえる内容ではなかったのである。

つまり、授業において伝えたいことが伝わっていない

ということは、受講生の興味・関心を得ることができていないということであり、授業としての評価は低いものと理解せざるを得ない。逆に、伝えたいことが受講生に伝わり、それについて受講生に自分なりの意見や考えを持ってもらえれば、その授業は評価されるものと理解できるかと思われる。

極端な考えであるかもしれないが、授業を行った結果、受講生の理解度が低く、試験の結果も全体的に思わしくないということは、満足度の高い授業ではないということであると評価することができると思われる。レポートの質、試験の結果を、「授業評価」としてとらえることが可能であると考えられる。

4. まとめ

6年間に渡り、たった6回の講演を行っただけでこのようなレポートを提出することは大変おこがましいとは思いますが、筆者の講義内容と受講生のレポートを見比べることを繰り返した結果、授業改善とは、知識を提供する側、つまり教員が常に学生の理解度に気を配りながら授業内容を改め、かつ、受講生自身に考えるという行為を求めるとともに、受講生を鼓舞することが重要であるとの考えに至った。そしてこれらのことは、単なる意識調査的なアンケートや、感想と言ったものから得られるものではなく、受講生からのレポートや試験結果に含まれる学生からのメッセージを見出すことで、ようやく導きだされるものではないかと考えている。近年、パワーポイントの資料を基に授業を進めることにより、観念的に理解したと思いつく受講生が増加しているのではないかと、また、ノートをとるという行為が軽減される傾向があり、その為に、自ら情報を整理し、知識として再構築するトレーニングの機会が失われているのではないかと危惧している。今後、授業を進めるにあたり、受講生は当該授業のまとめをレポートとして提出し、授業担当者はレポートの内容から授業の理解度の判断を行い、次回の授業に役立てる必要があるのではないかと考える。インタラクティブな関係は、相手の発信する情報を的確に理解し、適切な反応を返すことで成り立つ関係なのではないか。

大学で行われる授業が、受講生のレベルに迎合することが好ましいとは考えないが、受講生の理解度などを常に感じ取る姿勢が授業改善には重要であると思われる。授業運用のメソッドの開発を成功としてとらえるのではなく、常に受講生を意識し、その変化に対応することこそが、授業改善に必要な行動であると感じた6年間であった。

実践事例

謝辞

今回、レポートを作成している中で、私のような者に、正規の授業の中で毎年90分間という非常に大切な時間を与えていただいた先生方への感謝の念を再確認することとなり、改めて担当の先生にはお礼を申し上げたい。

また、大学の紀要にこのようなレポートを掲載していただけることについても、感謝申し上げます。

Class Improvement Based on the Reports
from the Attendance Students

Takeshi MONOBE¹:

For six years between 2008 and 2013, although it was only one time in a year, I lectured as a guest speaker with the theme of “Intellectual property rights in a university” as a part of class on “Industrial society and intellectual property” which has been held on the Center for Faculty-wide General Education.

I looked up the contents of reports from the attendance students for the class improvements. Based on this action, it is evident that students’ levels of satisfaction in the class were progressively raised through subsequently devised improvements.

Now, I suggest that the importance of understanding comments expressed by students and how applying them is necessary for improvement of classes.

KEYWORDS: Reports, Class improvement

2013年11月29日受理

¹ Liaison office, Kyoto Sangyo University